

Ⅳ 本校における教育課程と 教師・生徒との接点の研究 (時間割の科学3)

酒 井 為 久

時間割の管理・運用を研究することは、時間割がその学校の教育課程と教師とに深くかかわり、学校生活の主要な部分を時刻の上で規制しているところから、重視されなければならないが、それだけに簡単には行ないがたいことになっている。本校は、教育・研究校であって、そうした学校経営上の中枢に位置する問題の一つを、4年間にわたって、普遍的な結論を求めて研究できるということを誇りに思うのであるが、現実には、教育の場を円滑に効果的に推進しながらの研究であるという困難と同時に意義とを感ずるのである。従って、私は、この間始業30分前には登校していることを心がけ実行して（これは普通のことであって、特に記すことでもないが本校にあっては特異なことらしい）単なる研究でないという姿勢を自らに課してきたのである。そして、本校紀要に2回にわたって発表してきた稿に次ぐのが本稿であり、今回は、一応の結論としての私なりのまとめをしたいと考えたのである。ただし、管理者という立場にあるものではないので、実践をふまえながらも抽象化し一般化して、考えとしてまとめたものであり、その意味で純研究的な産物であることをことわっておきたい。

(1) 時間割は調整の機能中心であること

結論的にいえることはこれである。時間割をもって独創的な機能を発揮させようとしても不可能であるということが、明確になったことの一つと思われる。それは、時間割係に一般会社の労務係といった程度の任務がなく、民主的な学校組織ではそれを必要としないからである。一定の条件内で出来上った時間割を、一定の範囲内で運用することが課せられた任務であるからである。そうした時間割係の学校内における位置づけが、時間割の機能を決定づけているといえるのである。

しかるに、一定条件・一定範囲をはずれた、例えば同時に多数の教官が出張するといった事例があった場合、他に完全に調整の役割を果す部署があれば問題がないのであるが、本校の例からすると往々時間割にそうした問題の処理をまかし、時間割係に苦情が集まる傾向があるのは、ある意味で矛盾したところであろう。この場合、時間割係の位置づけを変える以外に方

法がないのであるが、時間割係の任務が、多く教師間の授業時間の調整にあるというところから、学校運営が教官会議中心で行なわれている場合、速決できないもどかしさが残り、時間が徒に経過してしまうことになるのである。

時は貴重なものであるという認識にたてば、時間の管理・運用に互いに心を配るしくみができているはずであるが、時は貴重なものであるということを実行するには苦痛が伴うので、お互いに成り行きにまかすことに終るのが人情の自然であるといえるようである。これは、教師集団のモラルの問題であると思われると同時に、リーダーシップの問題でもあると思われるのである。時間割を科学として検討してみて、結局のところ、行き着いたのはここであった。これらの問題をどう処理したらよいかということは、学校経営の根幹の、しかも最も困難な課題であるということがわかったことを報告したい。

(2) 教育課程を生かすのは教師であること

時間割を通して考察することから明確になったと思われることの一つに、本校の教官構成の状態とそこに至る本校の歴史が時間割に有形無形の影響を与えているということがある。学校の教官構成とその勤続年限が、教育課程の十全な展開に直接に係っている点があり、現に働いている時間割を規制しているのではないかと思われるのである。学校社会の人的構成の面がそのあり方を決めるのは当然であり、伝統や慣習が独善に陥るのをふせいでいるという点への興味が、私の場合、本校へ第1回生として入学し、名古屋大学で勉強し、公立高校で1年間教鞭をとった後に本校へ就職しており、14世紀にわたりいわば本校とともに歩みながら、今、同窓会の仕事から多大な教えを受けつつ、それぞれの時期の本校での教育と卒業後の同窓生の活躍とを身近かに対照できる視点と幸せを与えられているところから、増幅されて、この面からも時間割を検討しようとしてきたのである。

以下にまとめることは、本校の教官構成(表)は使用しているが、図式的に考える資料として利用しているに過ぎず、事実を述べたものではない。

まず、勤続年限の長い年功のある教官が、その年功

によって時間割編成に関する既得権を最大限に利用したとすると、本校の場合週あたり19時間の枠（表中の○印の部分）の中で、平均持時間15時間の授業を割り付けなければならなくなる事例が多く重なってくるはずである。そして、その枠内はぎっしりと詰まってしまい、変更ができていく状況となろう。次いで、勤続年限の短い教官を含めて、合理的な考えの下に、主として休暇等公的に認められた権利を使用して、空き時間が生じた場合、その処理のみを時間割係にまかされても処理できない事例が、本校においては数多く生じているのである。一方、統計的に見て、ここ数年皆勤でしかも時間を自主管理する教官が $\frac{1}{3}$ ほどいることは事実であり、空き時間の補充がそうした教官に集中することになるのは問題と思われるが、その原因はどこにあるのであろうか。

| 勤続 年数 年令 | 1~5 | 6~10 | 11~15 | 16~20 | 21~25 | 26~30 |
|----------------|-----|------|-------|-------|-------|-------|
| 60~56 | | | | | 1 | |
| 55~51 | | | | 1 | | 1 |
| 50~46 | 1 | | | | 3 | |
| 45~41 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | |
| 40~36 | 1 | 1 | 2 | | | |
| 35~31 | 5 | 3 | | | | |
| 30~26 | 7 | | | | | |
| 25~ | 1 | | | | | |

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 月 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 火 | | | | | | |
| 水 | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 木 | | | ○ | ○ | ○ | |
| 金 | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| 土 | | | ○ | ○ | | |

ここ数年の間に、表に見られるように教官構成の分極化が進んだことが、教官の意識や価値観の多様化を生んできているところに原因を見出すのは誤りであろうか。他者からの管理ということが一般に比較して少ない本校にあって、それぞれが存分に活躍できることの証左であって結構なことだといえるのであるが、それだけに、お互いが意欲をもってそれらを統合する工夫をもたねば書は教育課程の不完全な実施ということに及ぶのみのものである。必要なのは、本校の教育・研究校としての特色や利点を点検・検証し、それ

を本来の意味で生かすようにすることから、価値観の多様化を統合していくことであり、それ以外に方法がない（外からの管理・統制によるのを除けば）と思われるのであるが、時間割を通して考察している段階ではその努力が不足しているのではないかと感じられたのである。別に、新聞紙上等で社会問題として言われている40代教師数が多いことからくる問題が本校の場合もあるかもしれない。

(3) 生徒にとって時間割とは何かということ

答は、生徒の生活日課予定表の一部であるに過ぎないということであろう。しかし、一日の一番貴重な時間のほぼすべてを費す日課表であるので、落ち着いたある時刻表でありたいと思うと同時に、一定の期間にわたる生活のリズムが生れるようなものであることが期待されるのである。教師が時間割を考えるのと異なって、生徒には例えば空き時間を歓迎するというような意識の違いがあるが、恣意によって教育が行なわれるのではないことは銘記したいところである。

一体に、附属学校の生徒の特質として、私の立場からすると次の二点を特徴的なものとしてあげることができる。その一は、どこか一か所で中学生ばなれしたり、高校生ばなれした個性を持った生徒が多いということである。本校では、最近、入試制度の関係からそうした生徒が少なくなったが、当初においては他の附属同様に多かったのであるが、これはそうした生徒を集めたということの他に、そうした生徒を育てる雰囲気や附属にあるということ、卒業生の自慢に思うことである。その二は、大半の生徒が中高一貫六ヶ年生活をするわけだが、中学へ入学すると同時に、学区の友達や地域の人々との交わりが疎遠になり、小規模な本校の百名前後の同級生が友人のすべてとして深く皆の気持ちの中に位置づけられていくということである。そうした中における教育課程の実践は、おのずと特色あるものとなっているのを見逃がしがたい。

(4) 時間割の検討は何をもたらしたか

つきつめて言えば、経営学の実践勉強であるといえるであろう。現在37才である私が、そういう研究ができる本校のような特異な学校に身を置く幸運を感じると同時に、助言・協力していただく先輩・同僚に感謝するのである。そうして、私の附属学校観の骨組みも出来上っていくのを感じるのであるが、それらを今詳細に述べる機会であるとは考えていないのである。

48. 1. 12 記